飛騨・高山

残したい想いと風景

高山市

大工 飛騨高山の名匠（高山市認定）
井本（いもと） 雅弘（まさひろ）さん

長く使っていただける仏具を
無事完成させることができたのは
若い頃からお寺やお宮の建築を
たくさん経験させてもらったおかげや

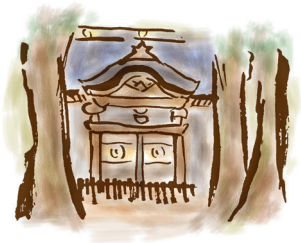
大工ひとすじ

中学校を卒業後、神社や寺を手がける「宮大工」の師匠のもとで技術を磨いた井本雅弘さんは、高山市内に建築会社を構え、さまざまな建築や修復を手がけています。

その技術を活かし、福井県にある寺院・永平寺に寄贈する仏具「施餓鬼壇（せがきだん）」の製作に挑戦しました。職人魂を込めてやり遂げたこの製作は、一世一代の大仕事となりました。

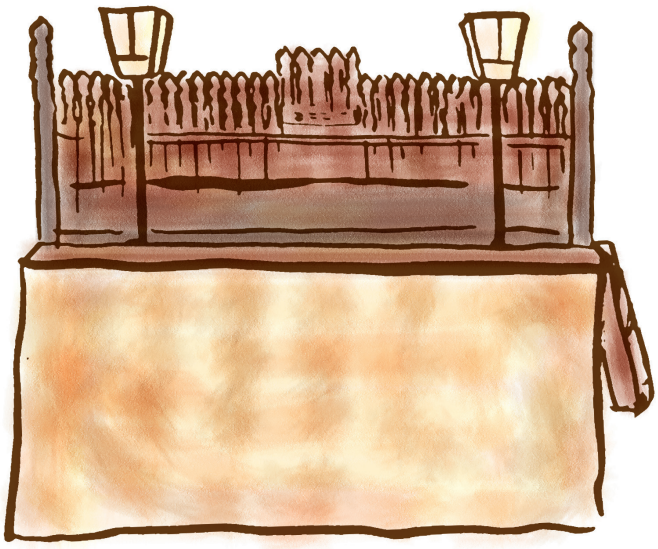
大工のなり手は減少していますが、他県から弟子入りを志願する若者もいるといいます。こどものうちから手仕事を見る機会を持つことで、この仕事に興味を持つ若い人が増えることを願っています。

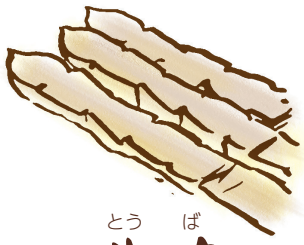
飛騨の匠が作る 永平寺の施餓鬼壇（せがきだん）



永平寺

福井県にある曹洞宗の大本山。
法堂（はっとう）への納品では、斜面にある長い回廊を通り、約380kgの施餓鬼壇を運びあげました。





塔婆（とうば）

機械で作ることが難しく、手作業でひとつひとつ作りました。
塗りを何度も重ねた後の厚みも考慮して寸法を計算しました。

飢えや渇きに苦しむ死者にお供えを施す「施餓鬼供養（せがきくよう）」のための仏具。
上段中央には開祖である道元禅師さまの位牌、両側には歴代の住職と、全ての生き物の位牌がそれぞれ置かれ、お供え物を置く台を囲むように「塔婆垣」が設置されています。

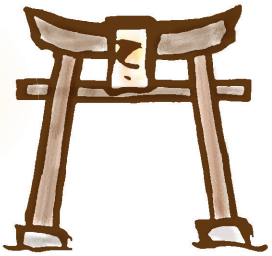
大工　飛騨高山の名匠認定　井本 雅弘さん

宮大工のわざ

特殊な建築方法や美しい装飾に
卓越した技術が光ります

彫り物

「建築彫刻」とも呼ばれる装飾も宮大工の仕事。軒下にあしらわれる「雲」や家紋の彫刻などがあり、昔からの決まった形や基本を学んだ職人だけが彫ることができます。



鳥居の建築

２本の柱で立つ鳥居は、昔からの知恵で倒れないような細工をしています。このような特殊な仕事を若い職人に伝えていくことを大切にしています。

後世に残る仏具製作

令和３年の夏、丹生川町北方にある正宗寺（しょうそうじ）の住職より、曹洞宗の大本山である永平寺に新しい施餓鬼壇を寄贈したいという相談がありました。

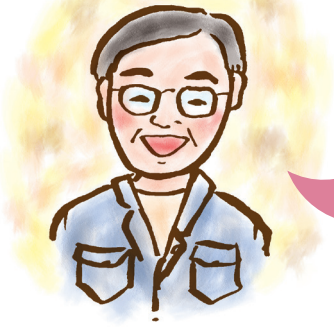
施餓鬼壇とは「施餓鬼供養（せがきくよう）」という法要の際にお供え物を供えるための台で、これまで使われていたものは昭和初期に活躍した丹生川出身の宮大工・稲尾素縄（もとなわ）さんが製作し、正宗寺から寄贈されたものでした。永平寺へ出向いてお坊さんと話したり、現物を見たりして、引き受けることが決まりました。

既存のものには飛騨産のヒノキが使われており、今回も特によいヒノキを製材してもらえるよう手配しました。翌春には材料ができあがり、製作に入りました。

「塔婆（とうば）」という複雑な形の木板を加工するのは特に大変な作業でした。人に手伝ってもらうと同じ形にならないため、一人ですべて手作業で作りました。これに飛騨の伝統工芸である春慶塗りの職人が下塗りをし、永平寺のお坊さんが筆字を書いた上から、さらに塗りを何度も重ねます。高山から永平寺まで片道３時間の距離を計13回行き来しながら、お寺や職人と連携して作業を進めました。

完成した施餓鬼壇を設置する際には、斜面にある長い回廊を慎重に運びあげなければなりませんでした。たくさんの人の協力を得て、令和５年の秋、無事に法堂（はっとう）へ納めることができました。

いま、伝えたいこと



こども時代、家に住み込んでいた石職人さんが、墓石に名前を彫ったり、石臼を作ったりする見事な仕事を見せてもらった思い出があるんやさ。今は機械でできるけど、**手で作ったものだけの良さ**があるな。
今のこどもたちは、**職人の手仕事に触れる機会**が少ないけど、こどもの頃の経験が大人になってからの職業につながる元になると思う。職人の技に興味を持つ人が増えるといいな。

（文・絵）大森貴絵
（企画）高山市

©2024 高山市デジタルアーカイブ